2022年7月10日  川越教会

丸山　勉

キリストに結ばれる

［エフェソの信徒への手紙2章11節～22節]

だから、心に留めておきなさい。あなたがたは以前には肉によれば異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました。また、そのころは、キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました。しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律ずくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

[１]　信仰は、「理屈」ではなく「出会い」

 私たちは誰一人自分の努力や力で信仰に入った者はいません。これはとても不思議と言えば不思議な事ですが、どこかで私たちは、神様にとっ摑まってしまった、という経験をする（した）ということがあるのではないかと思います。自分が主イエスを掴まえたと言うより、いつの間にかイエスの方が私を掴まえて下さった、捕えて下さった、そのことでとても楽になった、自由にされた、そういう経験を与えられたという方は多いと思います。私自身もそうなのだと思います。私は、元々とても理屈っぽい人間で、商品カタログを見るように色々なものを比較して、よく理解して、納得して、そうでなければ信仰を持つことはないと思っていました。‟損したくない”と言いますか、間違いたくないのです。けれども、それは違うなということがある時分かったように思ったのです。教会に来て礼拝をしている人は、必ずしも皆信仰のことをよく勉強したから信仰を持ち、讃美歌を歌っている訳ではないなと。そうではなく、心が解放されている、喜びが与えられているから讃美を歌っている、輝いている。そう思いました。「理屈」では、人は輝けないと思います。解き放たれている自由、それが賛美をしている人の声や表情に現れているなあと思いました。そして、それは聖書の教義を理解すると言うより、イエス・キリストという方との「出会い」なのだな、ということが段々と分かってきたような気がしています。

［２］ 神様が用意された「かすがい」

今日のエフェソの信徒への手紙2章の箇所の中でも、中心的な言葉は「キリスト」という言葉です。12節では「そのころは、キリストとかかわりなく」、13節で「今や、キリスト・イエスにおいて」、「キリストの血によって」、14節と15節に「キリストは」、17節には「キリストはおいでになり」、18節は「このキリストによって」、20節にも「キリスト・イエスご自身」、そして21節と22節に「キリストにおいて」という言葉をパウロは用いています。これは「手紙」です。今のようにコンピューター上でコピー＆ペーストなんて出来ません。同じ言葉を何度も繰り返し手で書いたのです。そしてそれは喜びだったと思います。

信仰にとって、なぜそんなに「キリスト」ということが大事なのでしょうか。こう言うことも出来ると思います。彼は「神」と私たち「人間」との間の「かすがい」だからだと。「かすがい」というのは建築などに使われる材木と材木を繋ぎ止める、コの字型をした大きな釘ですね。パウロは言っています。ユダヤ人ではないエフェソの人々に対し（私たちも同じ立場ですが）「約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました。しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。」この世にあって、希望を持たずにあなた方は生きていたではないか、とまずパウロは語っています。何か自分の存在が宙ぶらりんに思える。生きている根拠が分からない。普段隠されている、そのような思いが胸を締め付ける時があります。それは「神を知らずに生きて」いたからだと彼は言い、その後で、しかし以前は神様と遠く離れていたあなた方も、今は離れてはいない。近いのだ、と言うのです。「今やキリスト・イエスにおいて」「キリストの血によって」。これが神様がご用意された「かすがい」です！ただ、神様からの「かすがい」。

17節に「キリストはおいでになり」と言う言葉があります。‟私たちの所に”ということです。もともと近くにおられたのではなく、言ってみれば出向いて下さったのです。イエス様の「外交」です。インターネットが普及しているこの世界でも「外交」は大事です。足を運ぶことでお互いが和らぐことはありますし、仲たがいしているような国の間を取り持ってくれる国や機関のお陰で関係が改善される、そういう「平和外交」も、この世界でとても重要だと思います。14節にこうあります。―「実に、キリストはわたしたちの平和であります」。キリストこそ、わたしたちの平和なのだ、と。それは逆に言うなら、元々の私たちの心の中には「平和」はないということです。これはとてもリアルではないでしょうか。―「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、ご自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律ずくめの律法を廃棄されました」。この箇所から語られたメッセージで、私がとても教えられたものがあります。今日はその文章を読ませて頂きたいと思うのです。蓮見和男先生という日本キリスト教会の牧師で、ドイツの著名な神学者の多くの訳業もされている方ですが、**『御言葉はわが足のともしび―日々に聞く聖書と祈り―』**という本の中からです。

**「『キリストはわたしたちの平和』です。それは第一に、神と私たちの間の平和です。それはキリストご自身の平和ではなく、むしろキリストは、そのためご自分の平和を投げうって、私たちの平和を築く隅のかしら石となられたのです。そこには全建築の重みがのしかかっています。東洋的平和は、浮世から逃れて平穏を保つことに主眼が置かれますが、キリストの平和は、罪のままの人間を愛するため、私たちの罪の真直中に来られるのです。ご自分の肉によって、敵意を滅ぼし、自己を投げうって買い取られたのです。一つになるべきものを二つに分かれさせるものは、「敵意」にほかなりません。それは「敵」とは違います。「敵を造る心」です。敵は他者ですが、敵意はまさに私の中にあるものです。****私たちは「敵」ばかり考えて「敵意」を忘れています。それは相手に対し否定的に働く力、自己しか認めぬ心です。キリストは敵を滅ぼしたのではなく、「敵意」を取り除いたのです。そしてむしろ敵を愛されたのです。『わたしたちの平和』とは十字架によって敵意を滅ぼされ、二つのものが一つにされることです」。**

［３］ キリストが、私たち相反する者を結び付けてくれる

本当にそうではないでしょうか。蓮見先生は、「敵は他者ですが、敵意はまさに私の中にあるものです」とおっしゃいます。先日のあの恐ろしい事件は、「敵意」の暴走とも言えるでしょうか。被害を被ったのが少し前の首相だった人ですからとてもセンセーショナルな出来事なのですが、ただ、元首相云々ということでなくても今の世界、インターネットのSNSなどの世界などでは、人を「なきもの」にするような言葉が溢れています。「憎悪」の言葉、それこそ「敵意」というものは、簡単に私たちを虜にしてしまい、他者も滅ぼしますが、自分自身をも壊していくのではないでしょうか。あの41才だと言われる容疑者の蛮行はきちんと裁かれるべきだと思いますが、敢えて申しますが、私たちの心の内側は大丈夫なのでしょうか？私は大丈夫などと言える自信がありません。敵意はいつの間にか、私たちの中で増殖するのです。けれども私は信じています。だからこそ、こんな私たちのために、イエス・キリストは、ご自分が人間の敵意、憎悪を一身に身に受けられるため、身を裂いて十字架で血を流すため、つまり私たちを神との平和に引き戻すために、この世界、そして私たちの心の内側に来て下さったのだ、と！イエス様の、命懸けの本気の「平和外交」です。蓮見先生は書いておられましたね。―‟私たちは「敵」ばかり考えて「敵意」を忘れています。それは相手に対し否定的に働く力、自己しか認めぬ心です”と。そして‟キリストは、敵を滅ぼしたのではなく、「敵意」を取り除いたのです。そしてむしろ敵を愛されたのです”と。

人を本当に変えることが出来るものは愛です。神様の赦しの愛です。私たちはここにこそ立ち帰る場所を持っています！これがどんなに幸いなことか。キリストが、二つの相反するものの間にいつも居て下さるのです。キリストの愛は、強引な愛ではありません。キリストが真ん中にいて下さって二つのものを一つに結び付けてくれる。私と誰か―妻でもいいですが―の間に入って「平和外交」をしてくれる。どんな平和外交か。「神様に、あるがまま赦された者同志として、受け入れ合って生きていきなさい」という外交だと思います。教会もそうでしょう。教会の主はイエス様なのですから。イエス様の愛が支配しているのですから。パウロは今日の最後の所で「神の住まい」という表現をしていますが、私たち、ご一緒にこの住まいの中で真の安らぎを得たいと思います。またそのように、聖霊によって育てて頂きたいと思います。21～22節をお読みしてお祈り致します。―「キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。」

お祈り致します。

　神様、恐ろしい事件が後を絶ちません。戦争も止みません。どうぞこの私たちの世界を憐れんで下さい。私たち自身を憐れんで下さい。私たちのために、あなたはこの地上に来て下さいました。十字架によって平和を作って下さったと言われます。その平和を、どうか悔い改めの中で頂き、具体的に、他者と共に生きる生活へと導いて下さい。相反する者同士だからこそ、その真ん中にキリストがいて下さっていることに目を開かせて下さい。あなたとの出会いの喜びを、日毎に与えて下さいますように。主イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。